



地区ロータリー財団委員会

委員長 佐藤 俊一

(大阪鶴見RC)

ポールハリスがロータリークラブを創設したとき、現在のような国際的組織になるようなことを想像していたでしょうか？彼の念頭には異業種の会員との親睦と情報交換そして職業倫理の確立がまずあったとおもわれます。その後、社会奉仕とその延長線上にある国際奉仕へと進化をとげるのは、ロータリークラブが国際ロータリーと呼ばれるようになるロータリーの歴史の必然性であったでしょう。

我々が毎週の例会に集まるのは創始者の原点を継承しているとおもわれます。一方、日常のロータリー活動とは一番遠く離れたその対極にあるのが財団のプログラムであり、そのことが、財団は分かりにくいとか馴染みがないといった評価がなされる原因のひとつであるかもしれません。

多分、財団の活動に感銘して、ロータリークラブに入会した人はまれであります。私自身の経験からしても、入会当初はいわゆるまま、財団に年次寄付を払っていた程度の認識でありました。その後、GSEのチームのホームステイをひきうけたり、財団奨学生のお世話に関わるようになってはじめて財団の内容が見えはじめました。最近では所属クラブがベトナムでのWCS活動に補助金を受け

たことにより、クラブ内でも財団のプログラムが身近になった傾向があります。

人道的プログラムであるポリオ撲滅に関しては、ポリオという意味はわかってほとんどの日本人はポリオの患者を見たこともなく、それは遠い国での問題であるようにみえます。実はこのプログラムは日本人ロータリアンが提唱して、世界に広まったプロジェクトであり、かつて125カ国の罹患国が今や4カ国を残すのみとなり、終結まであと一歩という状況であります。

財団がその目的とする「人道的、教育的、文化交流プログラムを通じて世界理解と平和を達成しようとする国際ロータリーの努力を支援する」という壮大な理想を実現するためには、ポリオの例のように、見も知らない土地の恵まれない他人におもいを馳せる想像力と善意を持たなければなりません。そのような人の集まりがロータリアンであり、ロータリークラブであると信じています。同時に人道的支援だけでなく、教育や環境整備を通じての財団プログラムも重要であり、その目的のための財政的支援もまた必要であります。